

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720049

研究課題名（和文） 連鎖劇における映画・演劇相互の関係性についての総合的研究

研究課題名（英文） Relationship between film and theatre in *Rensageki*

研究代表者

横田 洋 (Yokota Hiroshi)

大阪大学・総合学術博物館 助教

研究者番号：50513115

研究成果の概要（和文）：

本研究は、映画と演劇を組み合わせた芸能である連鎖劇を中心に扱うことで、20世紀初頭の映画と演劇の関係を捉え直すことを試みたものである。連鎖劇が誕生し、流行し、そして衰退していった過程を、特に大衆的なジャンルからの影響や地方の事例を中心に検証した。連鎖劇は、日本の初期映画をめぐる歴史の中で、また映画が登場が演劇に与えた影響という点においてもきわめて重要な役割を果たした芸能であった。

研究成果の概要（英文）：

This research project attempted to rethink the relationship between film and theatre in the early 20th century, investigating the history of *Rensageki*: combination performance of film projections and live performances by actor. In particular, by investigations into the actual circumstances of popular and provincial cases, this project would make clear the processes how *Rensageki* originated, came into fashion, and declined. *Rensageki* played an important role in the Japanese film and theatre history, especially in the viewpoint of the historical influences of the birth and the development of the film industry.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学 芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：映画史・演劇史・連鎖劇

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の対象である連鎖劇とは、映画と演劇を組み合わせた形態の大衆的な芸能で、特に大正時代に全国的に流行したものである。明治末期に映画が輸入されて以降、映画と演劇を組み合わせる試みは様々に行われ、その手法も様々に考案されたが、大正期に舞台での実演と映画の上映が場面ごとに交互に行われるものを一般に連鎖劇と呼んでいた。大正期には各地の劇場や映画常設館が軒並み連鎖劇専門になるなど、大変な流行をみたが、大正末期から昭和初期には、その興行はほとんど行われなくなった。従来の歴史研究では、連鎖劇の場合、その性質上、映画史と演劇史の両方に関連する研究対象ではあるが、そのどちらにおいても十分には扱われてこなかった。多くの場合、連鎖劇は、映画が独自性を持つ芸術としての地位を獲得する以前に存在した映画の未熟な形態と捉えられ、あるいは映画が独自性を獲得する過程において、その発展を阻害した反動的な存在とも捉えられていた。しかし、近年の映画史研究では19世紀末から20世紀初頭の初期映画を捉え直す傾向が強まっている。1910年代以降に特にハリウッドで確立した古典的物語映画とは異なる表象体系の元に初期映画は存在したと論じられ、従来の発展的・直線的な映画史記述のあり方が相対化されるようになった。また、同様に映画と演劇の歴史的関係についても再検討が進んだ。従来、映画と演劇の関係は、演劇から映画へという一方的な流れとして理解されてきた。しかし実際には映画と演劇の影響関係は単純な直線的な流れとして理解できるものではなく、相互に補完的であり、流動的であり、複層的なものであったことが指摘されるようになった。連鎖劇が興行として成立したのは日本特有の現象ではあったが、このような世界的な研究の流れの中で、映画史・演劇史における連鎖劇の重要性も徐々に認識されつつあった。しかし、連鎖劇の本格的な研究はこれまでほとんど行われてこなかったために、他の分野に比べ基礎的な情報収集や調査、それに基づく実証的な研究が遅れていた。こうした状況のもと連鎖劇に関わる実証的な研究を進める必要があった。

## 2. 研究の目的

本研究において中心としたのは基礎的な連鎖劇関係の資料を調査することである。より多くの実証的事例を積み上げることにより、現代では不明となった点も多い連鎖劇を検

証し、近代日本における映画と演劇の関係性を考察することが目的である。一口に連鎖劇といっても、様々な形態のものがある。映画と演劇をどのように組み合わせたか、作品全体に占めるそれぞれの割合という面からだけでもそのバリエーションは多様である。その多様性は表面的な上演形態からのみ論じられる問題ではなく、それをとりまく環境、特に興行的な実態と合わせて考えるべき問題である。例えば、松竹のような演劇興行会社が劇場で行う連鎖劇興行、映画会社が映画常設館で行う連鎖劇興行、あるいは映画会社が劇場を入手してそこで行う連鎖劇興行といったように、興行主や興行が行われる場所が様々である。連鎖劇で使用されるフィルムが映画単体として配給されることも同時に目的として撮影されているものか否かといった点でも違いがある。こうした興行的環境は連鎖劇の上演形態に直接影響を与えていることは言うまでもない。連鎖劇はその上演形態のみでなく、興行的環境からみても映画と演劇の境界に存在していた。その境界線は固定されたものではなく、互いに侵食しあう流動的なものであった。実証的な調査を通して、様々なタイプの連鎖劇の具体的な事例を提示し、同時に連鎖劇をめぐる映画と演劇の関係の複層性を明らかにすることが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究の目的は、連鎖劇をめぐる実証的な歴史研究を中心に進め、それを根拠に映画と演劇の関係性を理論的に考察することである。そのため、連鎖劇に関わる歴史的資料の調査は本研究が最も重点を置く作業である。連鎖劇に関わる資料としては、まず、連鎖劇で使用されたフィルム・台本などが考えられるが、これらは現存例が極めて少ない。その他、主要な資料としては芝居番付やチラシなどの興行資料がある。これまでもこれらの資料の調査に基づく研究を行ってきたが、新たな資料の発掘・調査を引き続き行い、資料の調査・分析と同時に理論的考察も行った。本研究において調査の対象とした主な資料としては早稲田大学演劇博物館が所蔵する「連鎖劇関係資料」と各務原市歴史民俗資料館の所蔵する「市川百十郎資料」などである。これらの資料は東京や大阪、京都といった大都市の興行街ではなく地方を旅回りしながら興行を行っていた連鎖劇に関わる資料である。また無名の俳優時代の衣笠貞之助や浅草の見世物の文脈で登場した中村歌扇といった俳優の上演した連鎖劇を調査することで、大

都市の中心的な芸能に限らない連鎖劇の全体像を検討した。

#### 4. 研究成果

本研究ではまず早稲田大学演劇博物館所蔵の連鎖劇資料、各務原市歴史民俗資料館所蔵の市川百十郎資料などの調査を行った。それらは連鎖劇の地方興行の資料ということもあり、興行の基本的情報などが必ずしも明確ではないものも多かったが、資料を再調査することにより、改めてその全体像とその性格を把握することができた。特に早稲田大学演劇博物館所蔵の連鎖劇資料に関しては、早稲田大学演劇映像学研究拠点の共同研究者のメンバーと協力し、新たに詳細な情報を入力したデータベースを作成した。またその際、同資料に含まれる『底の響』という連鎖劇作品に関して演劇台本と映画台本という複数の資料から映画と演劇の関連性のあり方を指摘した。

また中村歌扇という女優についての研究も集中的に行った。中村歌扇は「連鎖劇」という言葉を初めて用いたとも言われる女優で、連鎖劇史上きわめて重要な人物であるが、本来浅草の見世物の文脈から登場した女優であった。その歌扇を中心に、浅草の見世物をはじめとする周辺のさまざまな興行をめぐる環境の中で映画と演劇を組み合わせる発想が登場した歴史的経緯を追い、論文「演劇類似の系譜—浅草公園六区の芸能と映画」でその成果をまとめた。さらに大正中期の連鎖劇や映画と演劇の関係について考察する際の事例として映画監督衣笠貞之助について調査を行った。その成果は、衣笠が女形の俳優として連鎖劇に出演していた時期を対象とした「舞台俳優時代の衣笠貞之助」、映画監督を目指し衣笠自身が連鎖劇制作した時期を対象とした「衣笠貞之助の連鎖劇制作」という二本の論文としてまとめ発表した。これらの論文は、俳優としてあるいは監督として無名だった時代の衣笠を対象としたもので、大都市の著名な俳優の連鎖劇を検証するだけでは見えてこない、芸能全体の中で連鎖劇の広がりとその実像を示した。

実証的な資料調査を中心に研究を進めてきたが、その成果を通して連鎖劇全体の位置づけに関わる問題にも取り組んだ。連鎖劇は同時代、特に芸能の純粋性、自律性を重んじる近代的な芸術観を持つ芸術家あるいは評論家から批判の対象となることが多かった。しかし、その批判的な言説を数多く検証することで、逆にどのようにして連鎖劇が同時代の観客に受け入れられたのか、また連鎖劇独自の魅力がどこにあったのかを議論した。その

成果は論文「近代的芸術観と連鎖劇」において発表した。連鎖劇は従来の直線的な映画史や演劇史がその性質上見落としてきたものであったが、その実態と全体像、そして、それを生み出した環境を改めて検討することで、演劇史・映画史をより広い文化的文脈で捉え直す新たな知見を付け加えることができたと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①横田洋「近代的芸術観と連鎖劇」『近代日本における音楽・芸能の再検討Ⅱ』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、pp. 55-68, 2012年、査読無し

②横田洋「演劇類似の系譜—浅草公園六区の芸能と映画—」『近現代演劇研究』3号、近現代演劇研究会、pp41-54, 2011年、査読有り

③横田洋「山長から澤正へ—大正期の道頓堀とその観客—」『上方芸能』181号、『上方芸能』編集部、pp17-20, 2011年、査読無し

④横田洋「衣笠貞之助の連鎖劇制作」『演劇学論叢』11号、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室、pp. 248-265, 2010年、査読無し

⑤横田洋「舞台俳優時代の衣笠貞之助」『近代日本における音楽・芸能の再検討』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、pp. 125-136, 2010年、査読無し

[学会発表] (計4件)

①横田洋「女優中村歌扇の軌跡—映画・演劇・見世物とその交点—」早稲田大学演劇博物館「無声映画のフィルムとテキストの対照に基づく相互的同定研究」研究会、国立近代美術館フィルムセンター、2011/7/19

②横田洋「近代的芸術観と連鎖劇の本領」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センタープロジェクト研究「音楽・芸能史における芸術化の諸問題」研究会、京都市立芸術大学、2010/12/5

③横田洋「玉乗り、映画、首振り芝居—浅草芸能史の転換点—」、近現代演劇研究会京都集

会、京都府立文化芸術会館、2010/3/21

④横田洋「連鎖劇の資料紹介」京都市立芸術  
大学日本伝統音楽研究センタープロジェク  
ト研究「音楽・芸能史における芸術化の諸問  
題」研究会、早稲田大学演劇博物館、  
2009/10/30

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

横田 洋 (Yokota Hiroshi)  
大阪大学・総合学術博物館 助教  
研究者番号：50513115